

通常学校における特別支援教育研修の在り方

—ニーズ調査に基づくプログラムの設定とその評価—

○熊谷彩
(株式会社 LITALICO)

野口晃菜
(株式会社 LITALICO)

米田宏樹
(筑波大学人間系)

KEY WORDS: インクルーシブ教育 校内研修 通常学級

I. 問題の所在と目的

現在、研修についてはニーズ調査や研修の在り方等、様々な研究があるが、研修内容が実践に活かされたか否かについては深く言及されていない。研修の効果として、実践上の変化も調査する必要がある。長曾我部ら（2007）は、校内で研修を実施する場合、受講者のニーズとマッチしない研修を受けざるをえなくなり、研修の時間を割いても、研修効果が見られないため、研修の組み方の工夫が必要であることを指摘している。本研究では、研修のニーズ調査も兼ねた教師の「特別支援教育の視点での配慮や工夫」の実施程度自己評価チェックリストを作成し、ニーズに基づいた研修内容を設定し実施する。教師自身が自己評価後に研修を受講することで参加意欲を高め、研修効果を実感できるよう配慮した上で、受講前後の教師の意識、実践の変化を評価し、研修の在り方を考察することを目的とする。

II. 課題と方法

1. 課題1 自己評価チェックリストの作成

(1) 目的：通常学級の中で実施できる合理的配慮における具体的内容やユニバーサルデザインの授業等の知見を整理し、実施程度自己評価チェックリストを作成した。

(2) 方法：先行研究等を資料に、通常学級で特別支援教育を行う上で有効とされている知見を整理し、多く取り上げられている事項をまとめた。小貫（2010）を参考に、仮のチェックリストを作成し、特別支援教育の専門家2名と、大学院生・大学生数名で、項目について検討及び追加修正を行い、「学級環境・授業作りのユニバーサルデザイン自己評価チェックリスト」（以下チェックリスト）を作成した。

2. 課題2 研修ニーズに基づく研修内容構成と研修の実施

(1) 目的：効果的な研修を行うために、作成したチェックリストを用いて教師の研修ニーズを調査し、ニーズのある研修を実施した。

(2) 対象と時期：通常のA小学校全教師（19人）

チェックリスト：6月実施 研修：8月実施

(3) 方法：教師が自己評価したチェックリストのコピーを回収し、共通して取り組まれていない項目を取り上げ教師の困り感から研修プログラムの設定を行った。研修の実施は、研修提供実績のある特別支援教育の専門家が行った。

3. 課題3 研修の成果の確認とその評価

(1) 目的：研修前後の教師の意識及び行動の変化を分析して研修の評価を行った。

(2) 対象と時期：チェックリスト・教師の意識変容：A小学校全教師（19人）教師の行動変容：A小学校教師の内1名 全て11月に実施。

(3) 方法：①チェックリストの分析は、研修事前事後に行うチェックリストの変化を分析し、研修成果を評価した。②教師の意識調査は、研修の直前直後にアンケートを行い、直後の意識の変化を分析した。また、その3ヶ月後に事後アンケートを行い再度意識の変化と研修成果が実践に活かされているのかについても分析した。

③教師の行動観察は、研修の事前事後に授業における教師の行動観察を行った。観察者が、チェックリストの項目に基づき観察を行い教師の行動上の変容を記録・分析し、研

修成果を評価した。

なお、本研究は、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認（筑28-30）を得て実施した。

III. 結果と考察

チェックリストの結果をみると、教師の考え方によって回答が異なるものや、学年によって異なるものも見られたが、どの項目においても積極性が低いと評価できる回答があった。授業観察では、教師がやっていると感じている内容でも客観的に見るとやっていないと評価できるものや、効果的に実施されていないものがあることが明らかとなった。聞き取り調査では、児童の実態が異なり具体的な困り感は異なる一方で個別対応についてはやりたいけれどできないという声が共通して挙がった。特別支援教育において、個別対応をするという認識が強く、そのため負担感が強くなっていると考えられる。授業観察からも、個々の対応に追われて教師が思うように個別対応ができていない状況が観察されている。したがって、研修内容としては個別対応に焦点を当てるだけではなく、学級全体にとってより過ごしやすく学びやすくなる視点を学べる研修が有効であると判断した。

実施した研修のテーマは特別支援教育であったが、個別対応だけでなく全ての児童にとって学びやすい学級・授業作りについて研修を実施した結果、特別支援教育の視点だけでなく教育全般の視点でも困り感の解消が見られた。中には個々のニーズに合わず困り感が解消していないと回答した教師もいた。しかし、研修を受講した全ての教師が実践に活かしたいと事後アンケートで回答しており、研修直後は全ての教師が意欲的な気持ちを持っている。直接的な困り感の解消に繋がっていない場合でも意識の変容が見られて、意識が高まることが明らかになった。

研修事後調査から、研修受講後に特別支援教育と教育全般どちらの視点においても、意識・行動に変化が見られ研修で得られたことが実践に活かされたと自覚している教師が多いことが明らかとなった。実践に活かすことができていると回答している教師は、新しい取組を行うだけでなく以前から実施していた内容に対して意識が向上したり以前よりも実施頻度が増えたりしていた。

また、研修受講後に継続している困り感や実践への活用における課題が次なる研修ニーズになることが示唆された。研修で得た知識から意識の向上が見られた後、その意識を持続させ実践への効果的な活用を行うためには一度の研修では不十分であると考えられた。

IV. 今後の課題

本研究は、対象が1校だけであるため研究対象人数が少ない。従って本研究で明らかになった研修におけるチェックリストの有効性や研修の効果を今後は対象を増やして検証することが求められる。

【付記：本研究は、文部科学省 特別支援教育に関する実践研究充実事業（特別支援教育に関するNPO等の活動・連携の支援に関する実践研究）による成果の一部です。】

【謝辞：A小学校教職員の研究協力に感謝いたします。】

(KUMAGAI Aya, NOGUCHI Akina, YONEDA Hiroki)